

# act 31

art, culture, tradition

[発行] 札幌市教育文化会館  
アクト第31号

February 2019



教文ワークショップ事業②

## コミュニティダンスWS

Community Dance Workshop



## 経験の有無や年代の壁を越えたダンス

コミュニティダンス事業として2008年度より始まったダンスワークショップ(WS)事業。最初に行われたのは、アメリカのコミュニティダンスカンパニー「リズ・ラーマン・ダンスエクステンジ」と札幌のWSメンバーによる合同ダンス公演でした。以降、ダンスシンポジウムやWS、参加者らとつくり上げた作品のホール上演などの変遷を経て現在に至ります。10年間、共通のテーマとして「経験、年齢、職業などの違いを越え、誰もが参加・体験できること」を掲げ、現在も新たなダンスの形を模索した事業を展開しています。





2008年度 ワークショップ発表公演

## リズ・ラーマン・ダンスエクステンジ

「シニアを取り入れた革新的ダンスパフォーマンス集団」として高い評価を持つリズ・ラーマン・ダンスエクステンジ。足や耳が不自由な人も含め20～70代の35名が参加し、ダンス作品を創作。



2017年度 ワークショップ発表公演

## The home dance

ザ・ホーム・ダンス ワーク・イン・プログレス

砂連尾理さんが構成・演出・振付、櫻井ヒロさんと河野千晶さんが共同振付を担当。「日常からダンスを作る」をコンセプトに、参加者の日常生活のエピソードから特徴のある動きや物語を抽出し、ダンス化。



2018年度 ワークショップ発表公演

## しっぷまいろー

CLP MYLO

スポーツをテーマに創作。構成・演出・振付に砂連尾理さん、櫻井ヒロさんと河野千晶さんが共同振付、演奏は小山彰太さん、石田幹雄さん、横山祐太さん、舞台美術は木木木人が手がけた。

INTERVIEW

意図せぬ動きに「ダンスを見つけてしまう瞬間」に魅せられて

2008年、「踊るのに必要なのは、ダンスの経験ではなく、その人自身」という言葉とともに札幌にもたらされた「コミュニティダンス」。

最初期から参加し、今もファシリテーターとしてワークショップ(WS)を重ねる櫻井ヒロさんと、

2013年にコミュニティダンスに出会い「生まれ変わったような衝撃を受けた」という河野千晶さんに、お話を伺いました。

— 櫻井さんは2008年の「リズ・ラーマン・ダンスエクステンジ」のWSにも参加されたそうですね。

櫻井:僕はそれまで4年くらいヨーロッパにいたのですが、海外では障がいのある人も含めてダンス経験のない人と一緒に踊るのはよくあることでした。それで、帰国後半年くらい経った頃に募集チラシを見て、懐かしいなと思って申し込みました。終了後、このままWSメンバーが解散してしまうのはもったいないと思って、公演の打ち上げでみんなに声をかけ、「コミュニティダンスグループtane」を立ち上げました。2010年には教文コミュニティダンス部ができ、教文を拠点に参加者を募ってWSと発表公演をするようになりました。

— ファシリテーターとしての活動がスタートしたのですか。

櫻井:年齢も背景もさまざまな人たちが全員楽しめるようにするのは難しいことだし、僕自身ダンスのキャリアがそんなに長くなかったので大変でした。「コミュニティダンス」自体、北海道で前例がないこともあって、参加者と議論になることもしょっちゅうで。最初の頃は「リズ・ラーマンの時はこうだったよね」みたいな感じで本当に手探り。教文で年1回開催されるシンポジウムの事例紹介で全国のユニークな活動を知りつつ、「コミュニティダンスとは？」ということを通して毎年メンバーで議論が紛糾するぐらい、それぞれのコミュニティダンス観も異なっていたんです。

— 2013年に京都で開催された「Dance 4

All」というコミュニティダンスのフェスティバルで、教文コミュニティダンス部も作品を発表し、河野さんは振付をされました。コミュニティダンスについてどう思いましたか？

河野:例えば、路上生活経験者によるダンスグループは、私が見てきたダンサーとは全然違う身体の持ち主で存在感もすごい。他にも、なぜか号泣してしまった父と娘が踊る作品も印象に残っています。それまで「誰もが参加できるダンス」なんて考えたこともなかったし、ダンサー像が強固にある世界で生きてきたので、「こんな世界があるのか!」と衝撃的。同時に、「私ちょっと間違っちゃったな」とも思いました。先生と生徒みたいにトップダウンで振り付ける関わり方をしてしまったけど、コミュニティダンスってそういうことじゃなかったなって。京都から戻ってきたらまるで世界が変わって見えて、生まれ変わったと思うくらい衝撃の体験でした。

櫻井:カラーが全く異なる全国からの作品を見て、どうやって出演者からこれを引き出したんだらうって思いました。出演者との関わり方というか。コミュニティダンスのような一つの価値基準に収束しない多様なものを、不特定多数の人と共有するのはすごく難しい。価値基準の異なる者同士が「自分たちがつくる作品の価値」を共有できないと作品は成立しないわけで、「Dance 4 All」で発表したグループはどれもその「共有」がきちんとできていたのがすごいなあと。

河野:2014年に初めて砂連尾さんのWSに参加して、「こんな作品のつくり方があるんだ!これだダンスになるんだ!」という発見がありまし

た。私が考えて形をつくるのではなく、ヒントを与えることでその人からちゃんと動きが出てくる。私がそれまでやってきたダンスは基本的にダメ出しの世界だったけど、コミュニティダンスはまず「いいね」と受け入れる。「いいね」を拾っていく作業でもあるんだなと。

— 作品と一緒に作る面白さは、ダンサーさんと一般の人とで違いますか？

河野:身体がめちゃくちゃ動くダンサーならではの楽しさもあるから、最初は違うものだと思ってたけど、「結局人間だし」という思いになってきました(笑)。でも、ダンサーの方が自由に踊るのが苦手という人は多いですよ。私もそうでしたけど「振付がないと動けない」というところから、いかに引き出していか。ダンサーに対しても良さを引き出すようなつくり方になってきたので、両方の面白さが近づいてきた気がします。

櫻井:千晶ちゃんとコンタクト・インプロビゼーションというダンスをやっているのですが、そこでの面白さは技術的なことを追求していく楽しさなんでしょうね。コミュニティダンスは技術的な面白さではなく「技術がないところの面白さ」。その人が日常で培ってきた動きがダンスとして見える瞬間、こちらがそこにダンスを見つけてしまう瞬間があって、それが面白い。本人が意図してないので再現性がないのだけど、それを再現して人と共有したい。

— それは「コミュニティダンスを見る面白さ」にもつながりますか。

PROFILE



[振付家・ダンサー]  
櫻井 ヒロ (さくらい ひろ)



[振付家・ダンサー]  
河野 千晶 (こうの ちあき)

micelle (ミセル)

2014年に櫻井ヒロと河野千晶により結成された接触と即興のダンス、コンタクト・インプロビゼーションのユニット。劇場と地域をより近く繋いだものに基づく、養護学校、高齢者グループホーム等でのワークショップや公演活動を行いながら、ダンスを通して様々な特徴を持つ身体と向き合い、他者との協調や主張のできる身体性を模索している。

micelle HP | <https://micelle.jimdo.com>

櫻井:2017年に上演した『The home dance』では、出演者にジャム作りが趣味の女性がいて、ジャムを作るときの動きをダンス化しました。彼女にとってずっと繰り返されてきた動きだから、無駄がない。無駄を削ぎ落とした身体性という意味ではダンサーと近いものがある、ダンス歴25年の千晶ちゃんとジャム作り歴25年のその人の動きには、同じ強度があると思う。

河野:養護学校でWSをしたとき、最初は恥ずかしがっていた女の子が、一緒に踊っているうちにフワッと気持ちを開いた瞬間があって。その子の内にある表現として出てきていないものが、急にパッと開いて「今、ダンスになった」という瞬間が急に訪れる。その瞬間にすごくキュンとします。

— 10年間を振り返ってみて、どうでしょう？

櫻井:一つの公共ホールで10年間コミュニティダンス事業を続けているのって、奇跡じゃないかな。全国的に見てもなかなかないと思う。シンポジウムで、毎回コミュニティダンスの定義を巡って炎上とも言える議論を重ねたことも財産です。あの激しい議論を積み重ねた上に今がありますから。その頃のメンバーが、今ではそれぞれ自分なりのコミュニティダンスを実践していて、それも素晴らしいことですよ。

コミュニティダンスと札幌市教育文化会館の10年間

リズ・ラーマン・ダンスエクステンジ合同ダンス公演をきっかけに教文コミュニティダンス部が結成され、手探りで始まったコミュニティダンス事業。地域コミュニティとダンスをどう結ぶか、模索し続けた10年間の試みを振り返ります。

[2016年3月27日] ダンスシンポジウム

ダンスの壺

櫻井ヒロさんによるアウトリーチの事例紹介、パフォーマンスの海外における事例紹介、砂連尾理さんによるWSのほか、2013年以降のシンポジウムを振り返り、社会とダンスについてディスカッション。



[2017年2月18日] ダンスワークショップ&発表公演

The home dance

ザ・ホーム・ダンス/ワーク・イン・プログレス

顔を洗う、歯を磨くなど日常の仕草をダンス化。元になっているのは何の動きだろう?と考える楽しさ。帰宅後、顔を洗うときにふとダンスを意識してしまうような、観客にとっての日常もダンスに変わりそうな余韻を残す作品。

[2009年3月19日]

リズ・ラーマン ダンスエクステンジ 合同ダンス公演

年齢、障がいの有無に関係なく、いろいろな力を引き出された参加者の語り、話す仕草や手振り身振りから生まれたダンスによって、詩的な世界が展開。「WSを通じて思いやりと挑戦することを感じた」とは参加者の声。

[2014年3月20日・21日] ダンスシンポジウム

ダンスとライフの間

コミュニティにおける演劇・ダンスの役割について考察する事例紹介、砂連尾理さんによるWS、教文コミュニティダンス部による成果発表、京都芸術センターによるダンスコミュニティづくりの取組紹介、ディスカッションを実施。



[2010年6月26日・27日] ダンスシンポジウム

ダンスの持つ力

1日目はコミュニティダンス体験WSとシンポジウム、2日目はファシリテーターのためのWSとミーティングを実施し、札幌でどのように活動を広げていけるか考察。



[2015年2月25日・26日] ダンスシンポジウム

ダンス糸電話

世界的に活躍する「山海塾」の事例紹介、グループホームみりの活動紹介、砂連尾理さんによるWSと事例紹介、ディスカッション等、コミュニティにおけるダンスの役割を考察。

[2018年2月25日] ダンスワークショップ&発表公演

しっぽまいろー

「OLYMPIC」を逆に読んで「しっぽまいろー」というタイトル同様、絶対にゴールしない短距離走や逆向きメドレーリレーなど、動きも逆さまに。ドラム、ピアノ、トランペットの即興的な演奏とともに、へんてこで不思議な世界が出現。

[2012年2月18日・19日]

ダンスコミュニケーションの現在

1日目は札幌から小学校でのアートを活用したWS事例紹介と教文コミュニティダンス部の成果発表。2日目は北九州のダンスによるコミュニティ活性化事例紹介とダンスWSを実施。

[2013年2月16日・17日] ダンスシンポジウム

ダンスコミュニケーションの拡張 ~地域のコミュニティをむすぶ試み

新鋪美佳さんによるダンスデュオ「ほうほう堂」の活動紹介とダンスWS、教文コミュニティダンス部による成果発表、函館と世田谷区のダンスによるコミュニティ活性化事例紹介、ディスカッションを実施。

[2019年3月3日]

櫻井ヒロさんと河野千晶さんがファシリテーターを務めるコミュニティダンスWSのショーイングあり!



札幌のコミュニティダンスは彼女から始まった！

## リズ・ラーマンの言葉。

2008年度のWS記録映像に残る、リズ・ラーマンへのQ&Aをご紹介します。



### Q. 参加者に何を感じてほしいですか？

A. まず言いたいことは、一般の人だけでやるとか、プロのダンサーだけでやるのではなく、いつも両方です。お互いに「知り合う」ことはたくさんあります。プロのダンサーは、ダンサーではない人たちが踊ることによって、それぞれの人が持っている動きのユニークさや素晴らしさを発見できる。一人一人が持っているものに価値があると気づいてほしいです。自分の持っているものがアートになりうる、美しいものになりうることを、知ってもらえる場になるのではないかと思います。

### Q. コミュニティダンスを始めたきっかけは？

A. 最初に高齢者の方と関わり始めたのは、私の母親が亡くなった時。そのことをテーマにしたダンスを作る際に、どうしても年齢を重ねた人を舞台上げたかった。フリをするのが嫌だったんです。そのことを始めたとき、これが本当ではないのかと思いました。そのことに気づいたとき、始まったのかもしれない。

お 問 合 せ

札幌市教育文化会館 事業課 TEL.011-271-5822  
〒060-0001 札幌市中央区北1条西13丁目

チ ケ ッ ト

教文プレイガイド TEL.011-271-3355 (9:00～19:00)  
第2・4月曜日(祝日の場合はその翌日)休み



札幌市教育文化会館

[www.kyobun.org/](http://www.kyobun.org/)



スマホからはこちら